

擇する事も自然に意得したらしい。

恐らく大きくなつても、いつか役立つものになるだらうと思はれる。

此の頃では段々大人の童謡に似て來た。私は童謡をすこしも知らないので、これから先どうして指導してよいか、見當がつかない。

私に出来る事、それは少しでも子供達の氣持を汲みとつて、生かしてやりたいと思ふ事だけだ。自分の多忙をよい事にして、子供と遊んでやる暇を見出せない事をすまないと思つてゐる。

安らかに子は慈まんよき父と

思ひつ今日も子にうとくして

昭和十六年十月二十三日

(これより後の童詩は一年經過)

滿五年一箇月作品集

(昭和十七年十月作品)

オヂイチャン

文之助^{フノノタケ}ノ オヂイチャンハ
シンデ シマツタヨ

ワタシハ ヤスクニジンジャニ
サンバイ シマシタヨ

ナガイレッツニ ツヅイテ
ウチノ オヂイチャンノ
トコロマデ ユキマシタ

ミンナ オガンデ

ナイテキマスヨ

ウチノ 文之助ノオヂイチャン

シンデ、カクレテ キルノデス

ワタシハ オガンデ カヘリマシタ

一七・一〇・二五

靖國神社

文子が生まれた時に誰も名をつける者がなくて一週間を過ぎてしまった。

お七夜には命名をしなければと云ふので、結局私が名づけ役になった。

「今度こそ男の子だ」と思つてゐたのに、又々、女の子が生まれたので、家内中落膽してしまつた。長女の生まれた時は、一人で意氣こんで居た家内の父親まで、氣拔けがしたと見えて、何も云ひ出さない。

委まかせたつもりでゐた私は全く困つてしまつた。暫く考へて見たが、これはと思ふ考へも出ない。突然、亡父文之助の事が頭に浮んだので、文の一字を貰つて、文子と命名することにした。

今になつて考へて見ると、よい名をつけたものと思ふ。文子には常に、亡父文之助の話をして聞かせるので、おちいちゃんおちいちゃんが靖國神社に祀られてゐると云ふ事は、文子

にとつてうれしい事らしい。

「文子の名は文之助の文を取つたんだね」と、お客様が尋ねてくると、自慢をする。不孝な私はいつも靖國神社の昇殿参拜を希望しながら、その機会を逸して申譯なく思つてゐた。

幸に、三十八年振りで靖國神社昇殿参拜の許しを得た私達一家は飛立つ思ひであつた。

おぢいちゃんに會はれると云ふので、人一倍喜んだ文子は、毎日／＼其の日を待つてゐた。

昇殿参拜して歸つてから二日目、「文子はおぢいちゃんのを歌を唄ひますよ」と言つて、前の童謡を唄つた。

文子の歌を聞いてゐるうちに、知らず／＼目頭が熱くなつて來た。

リ
ン
ゴ

ガ
リ
ガ
リ
リ
ン
ゴ

カ
ハ
モ
ム
カ
ズ
ニ

タ
ベ
マ
ス
ヨ

シ
ョ
ウ
ド
ク
シ
テ

タ
ベ
マ
ス
ヨ

オ
テ
テ
ヲ
ア
ラ
ッ
テ

タベマスヨ

リンゴ ハ オイシイ

エイヨウ アルヨ

ビタミンC ガ

アリマスヨ

シヤウジ

シヤウジ シヤウジ

シロクテ キレイ

シヤウジノ マンナカ

チョコント ガラス

アノソラ クロイ

モウジキ アメヨ

ユフダチグモ ダ

フツテ キタ

トケイ

トケイ トケイ

トケイハ マイニチ

カホヲ コチ

ナゼテキマスヨ

ニホンノ オテテデ

ナゼテキル

カッチン

ナゼテキル

ナンニモ タベズニ

キノドクネ

イツデモ ジカンガ

ワカリマス

一

サンリンシヤ

サンリンシヤ

チリン 〱 〱

ワタシノ ジテンシヤ

チリン 〱 〱

ワタシガ ノリマス

チリン 〱 〱

ワタシノ ジテンシヤ

オモシロイ

ハツシヤヲ シマスヨ

チリン 〱 〱

チンゴ 〱

ハシリマス

ナハヲ シバツテ

ハシリマス

チンチン ゴウ 〱

ハシリマス

デ ン シ ヤ

デンシヤ チンゴ

チン 〱 ゴウ 〱

アソビマセウ

ハツシヤイタシマスヨ

チン チン

オノリノカタハ

オハヤクイタシマセウ

チン チン

ウゴキマス

チンチン ゴウー

チンゴウく

オ ヒ サ マ

ナツガ キタキタ

オヒサマ デタヨ

ピカ く ピカ く

デテキタヨ

ワタシノ オヤネニ

デテキタヨ

オホキク 〱

ヒカッテル

アノ 〱 オヒサマ

ピカ 〱

キレイダ キレイダ

アカイネ

オホキク ミエマス

オヒサマヨ

ウチノガマガヘル

チヨコ 〱

アルクヨ

ウチノ オホキナ

ガマガヘル

ピヨン 〱

ピヨン 〱

ハシリマス

トンデ ユキマス

アナノナカ

コガヘル ピョン〜

デテキタヨ

カ
メ

ウサギ ウサギ

ナガイミミ

カメハ オミミガ

アリマセン

ノロマノ カメサン

ノロイデス

ノロ ノロ ノロ〜

オソイデス

カメハ ドウシテ

ノロイノカ

ノロ〜 ノロ〜

オソイケド

ミヅノ ナカデハ

チャプ チャプト

アシヲ ノバシテ
チャブ チャブ チャブ
ノロマノ カメサン
ハヤイナア

一七・一〇・三〇

ドングリ(二)

コツチノ モミチハ
スコシ ウスイ
ムカウノ モミチハ
マツカツカ

ドングリ コロノ

ハイ^キツ

カゼニ フカレテ

オチテ キタ

チイサナ シヒノミ

ドングリト

カゼニ フカレテ

オチテ キタ

ダレカ ヒロヒニ

キマシタヨ

チイサイ シツボハ

ダレデセウ

フトイ シツボハ

ダレデセウ

ドンダリ コロク

ハイ ヒトツ

ドンダリ(二)

ドンダリ コロク

ハイ一ツ

ワタシノ オイケニ

〔秋の風だよ、寒いね。〕の句あれどとる

ポツチャリコ

ワタシガ ミタラ

ドンダリハ

ユツクリ マガツテ

ダンくト

ナカノオイケニ

シヅンダヨ

ウサギノ ピョンチャン

オドロイテ

カアサン ドンダリ

オツコッタ

オイシイ ドングリ

・ オッコッタ

カアサン マアマアト

オドロイテ

キドモ オイケモ

サガシタガ

ドコニモ ドングリ

アリマセン

第二編 童詩の指導

幼児の文化

幼児の世界を考へても見た事のない人達にとつては、幼児の文化がどうの、かうのと云ふことは、呑み食ひの事以外はちつとも考へた事のない人達が、地球は丸くても平であつても、たいして氣にかゝらないのと同じ様な、無關心の問題である。

然し、實際は日本人である以上はたれも、この問題を度外視することが出来ないほど、大切な問題であることに、氣づいてもらはなければならぬのである。

大東亞を指導し、世界を畏服せしめる、新日本文化の建設には、先づ第一に立派な児童文化を育成すると云ふ事から、取りかゝらなければならぬのである。

それには、児童文化に關係する方々や、お母様方が、先づ衆にさきがけて、幼児に對して、深い思ひ遣りの情を持つて近寄り、彼等が立派な生活を身につける様な指導をしなければならぬ。

幼い者達の苦しみ、悲しみを抱いてやることの出来る教養を、お母様自身が持たなかつたならば、この問題は永久の課題となつてしまふだらう。

近頃になつて、急に児童文化の問題がとりあげられ、児童達は漸次幸福になりつゝ、はあるが、まだその範圍は、國民學校以上の児童を、對象として考へられてゐる様な嫌がある。身體的方面からの乳幼児の保護や、母性の保護は、次々に叫ばれて、世の認識を新になしつゝはあるが、幼児の精神的な方面に對する關心は、玩具以外、繪本以外には、あまりにもなほざりにされてゐることを、感ずるのである。

即ち、大人の考へたものばかりを與へ様として、幼い子供の心を取りあげてやる方面を忘れてゐる。

例へば幼児の創作した童謡を聴いてやつたり、童畫を見て指導してやつたりする様な、心持ちに缺けてゐる様に思ふのである。

言葉は精神生活を象徴するものであるが、幼児の精神生活は、彼等の幼稚な片言の

うちに發展してゆくものである。

言葉と云ふものを觀念的にのみ考へ様とする我々の態度を變へて、生活より生まれたい言葉、教養より生まれる言葉、創作としての言葉を考へて、幼児の片言を指導しなければならぬ。幼児の精神生活が言語と共に始められるとしたならば、この時機に於ける言葉と行動を合致させ様とする母親の努力は、幼児の生活の基礎を培ふものである。

然るに、日常の生活に於て、母親達は幼児の言葉を教育的に考へようとする努力を少しも持つてゐない。

幼児の片言を母親の生活の反省にまでとり入れ、家庭生活、社會生活の改善の材料にしようとする様な努力は、少しも拂はれてゐないのである。

たゞ可愛さだけがその全部であり、大人の生活の中に放置され、かへつて、間違つた指導さへ加へられてゐる嫌がある。

「無知蒙昧な未開人をも、幸福にしてやろう」とする、日本人の思ひ遣りの心は、大東亞の大なる戦果として現れてゐる。

大東亞共榮圈の中に住む、あらゆる民族を日本人と同じ様に向上させ、幸福にしてやろうとする、八紘一字の御精神は、日本の名譽と犠牲をかけて、なされてゐる。

新日本文化建設はあらゆる異民族の魂を生かさんとする日本精神が根底である。これはあらゆる文化に對する關心を、総合的な見地に立つて考慮出来る。日本人的教養性格からだけ可能なる問題である。

然しこれほどの大願を持つ日本人が、なせに、吾が子の片言である童詩に、無關心でゐられるのだらうと不思議に思はれてならぬ。

童詩の心

・ 兒童文化の研究が、國民學校入學前の、文字を知らぬ幼兒を對象として、考へられる様に努力することは最も喫緊なことである。

文字なきものの心の表現である詩を、如何に指導すべきかと云ふ惱を、吾が子の問題として解決し、又一方世の母親や、指導者の關心を、幼時の詩の芽生に留める一助ともしたいと思ふて、吾が子について考へさせられた點をまとめて見た。

私には、幼兒の詩が單に記録より消える儚さを感じさせられるのみならず、詩と共に、うち捨てられて省みられぬその純情を悼む心で一杯である。

吾が子を育てる事については、絶對とまで思はれる程の母親の思ひ遣りが、なせに純情の表現である片言の詩に、耳を傾けようとはしないのであらう。

幼兒の詩を聽いてやるのは、その魂を育む事になるのだ。

吾が子を眞實に愛しながら、文化の方面から、愛する形式を忘れてゐる母親を、幼
兒は一體どんな心で眺めてゐるのだらう。

お母様方よ。

幼き者の魂を育はぐくまふとするならば、どうぞ、片言の詩を聴いてやり、取り上げてや
つて戴きたい。

否、關心だけ示して下さらば、それで充分、たゞ黙つて領いてやり、家中揃つて熱
心に聴いてやる。これが童詩の一番よい導き方である。

如何に吾が子を愛してゐても、詩の世界を通じて愛するものの心を、とりあげてや
る術を知らぬとしたら、

「幼き者よ、その詩、その純情を、永遠に持ち続けよ」とは、どこまで親として望む
事が出来るだらう。

片言かたことの中に洩れる詩に耳を傾けることは、幼き者の心を育む事だ。

「大人の心で、児童を強制するのは、罪惡に近い」と云ふ事は自由主義の立場から、
かつて言はれた事であるが、事實、自由主義の立場からでなく、鍊成主義の立場から
言つても、

「幼き者の心は、社會、家庭の慣習の中にあつて、常に教育的に取りあげられぬ現状
である。」

文字なきものの詩

「詩や歌には、眼より入る文字の諧調と、耳より入る音聲の諧調がなければならぬ」
詩や歌が、眼に映るリズムを主として考へるべきか？

音聲よりくるリズムを主として考へるべきかには異論がある。

作詩と作曲を混同してはいけない。との考へも浮んでくる。然し、私にはそんなむづかしい事は解からぬ。

万葉集の作られた當時は、作詩と作曲が同時に考へられてゐた様に思はれる。文字を知らぬ幼児は、詩の表現に於て文字の制約などは、全然頭にはないが、自然に韻を踏むように表現する。

吾々が不用意に注意したり、干渉したりすることは、かへつて幼児の詩を損ふこととなる。

幼児も社会的な存在なれば、有形、無形、有意、無意に、時代の文化や環境から影響をうけて、それに新しい自己の獨創を加へてゆかなければならぬことは當然である。

幼児の詩は、自然に環境の影響をうけ入れて、すなほに獨自を表現するように導かねばならぬ。

童詩の表現は、自分の唄ふ音聲（出鱈目な節、多くは大人からの影響）や、自分の勝手な振付（大人から云へば出鱈目な踊り）に、韻を合せるようにする。

私達は、幼児の詩を、出鱈目と考へ勝ちであるが、それには、作詩、作曲、舞踊までが、同時に考慮されてゐると思ふ。これは大人の詩の表現に對しては面白い反省の材料となる。

文字なき者の詩は、常に心のまゝの表現であり、何等の掣肘も加へられない表現である。そして常に對象と一體であり、相手を批判したり、自己の分裂を表現したものは、一つもない。

いつも自己が対象そのものになり切つて居るのがその特徴である。

作詩と作曲が同時になされる詩。

文字なき表現の詩。純情の詩である幼児の詩は、又反面、忘れられる詩であり、問題にされぬ詩であり、記録されず、永遠に文化の表面に現れぬ詩である。

詩を作る人。詩を作曲する人。近代文明は詩と云ふものを、二つの分業として能率をあげてゐる。

これは勝れた文化を造り出す爲には、なくてはならぬことかも知れぬ。

詩に曲をつけるのか？

曲に詩をつけるのか？

私は何時の間にか音楽と詩をこつちやにして、勝手な理屈を云ふてゐたのだ。

「日本の詩、日本の音楽、万葉の和歌、平家の琵琶！田植唄！」
と、考へてくると、私の頭は全く混乱する。

然し、幼き者の片言のうちに洩す詩の中には！

大人が「たわ言」と、笑つて聞き流す、文字なきものの詩の心境には！

何か、詩の極地があるやうだ。

何か、神秘を生む力があるやうだ。

幼児の願ひ

幼児の詩には、國民學校で云ふ國民科も、藝能科も、理數科も、體鍊科も渾然一體の境地をなして、融合されて居る。

これらの分化以前の混然たるものは、歌心のうちに自然に育てられ、詩を通じて發展分化させられる。

幼児の詩は、あらゆる文化への發展の基であり、すべての分化への温床である。

このやうに考へると、幼児の詩を育む事は、やがてそれが、自然觀察への眼を開かせ、豊かなる思ひ遣りの基礎となり、綴方、話方への天分の發露となる。

國民學校一年、二年の話方や綴方の問題は教師にとつては最も大きい重荷である。如何に觀察を指導しても、發表させ様と努力しても、啞の様に黙つてゐる子供ばかり多く、教科書の眞似、雑誌の眞似を一步も出ない子供ばかりが多いやうだ。

感激を忘れ、想像を忘れた子供を不思議に思ふことさへある。否、感激はしても、想像は火花を散らしても、幼いときの教育が、その表現を堰き止めてしまつたのだ。夢を抱きながら、その夢を語つたり、綴つたりすることを忘れた子供を、一體どう指導したらよいのだらうと惱まされる。

幼児の世界にうとい教師達、夢を忘れた母親は、すべてが負擔となつて、放任し勝になる。

隣組の惱みの種の争は、夢をなくした子供達が、一つの遊び、一つの生活をも一緒に出来ない我の強さから來てゐる。

自分を相手の立場におき、他人の身になつて物を考へる心の訓練を持たぬ子供達を見たときに、小さい頃に誰もが持つ同位感を、そのまま伸して貫へずにしたつたのだと、思はせられる。

若しもこの子のお母さんが、幼児の持つ同位感を、素直に育んでくれたなら、大き

くなつてから、人の云ふことも素直に聴き入れ、國家の立場に立つて物を考へることも樂に出来る様になつたゞらうと考へさせられる。

他人の身になつて物を考へ、國家の立場に身を置いて行動する訓練は、國民學校に入つてから、躰けようとしては遅いのだ。幼時に植ゑつけられた種子だけが、天をも摩する大木になるのだ。

この意味からしても、幼兒の詩をとりあげることはその魂を救ふこととなるのだ。これこそ、明日の日本の芽生となるのだ。

可憐な幼兒の詩は、詩の世界に盲なる母親に、

「母親よ、眼を大きく見開いて、私の姿を見ておくれ。私の願をきいておくれ。私の眞の聲を聴いておくれ」と。

全身全靈をゆすぶつて、唄つてゐる様に聞えてくる。

童詩を育む

私が、姉妹の童謠をきいて見ると、姉の童謠には、大人の持つものや、繪本の影響が強い様である。

妹の方は自由で何か面白く、突然、奇抜な事を唄ひ出す。

自由な想、自由な表現に於て、姉の詩をとりあげてやる時期は、既に遅い様にも考へさせられる點がある。

若しも、童謠指導の時期と云ふものが考へられるとしたなら、満三歳以前に遡つて考へられなければならないかと思はれる。

子供の持つ豊かな夢。美しい詩心。純眞な魂に、母や一家の者達が共應してやれるだけの餘裕を持つて居れば、子供の詩心は損はれずに自由に伸びてゆく。

母親が、子供と同じやうに、常に情熱を以て、物を見ようとしないうで、打算や、お

都合主義で物を見ようとすることは、幼時の詩を害ふ根本である。

幼児が聲高に唄ふ純眞の世界を、

「お客様ですよ、うるさいね」などと、たしなめたり、

または、自分の持つ高い詩の境地から、子供の表現を、母親自身で面はゆく感じて「そんな出鱈目は」

などと、云はないまでも、耳を傾けようとしなない、よそ／＼しい態度は、子供の純情や、唄ふことに依つて、夢を生活してゐる子供の世界を打ちこわす原因となる。

子供の持つてゐる夢を、いろ／＼の経験を通じて豊かにし伸ばすために、幼心の中に抱くものを、そのときどきに整理してやる事は、忘れてはいけなない童詩指導のコツである。

幼い吾が子の初めての経験などは、母親が子供と共に其の日、見、聞きしたことを、要點だけでも子守歌の内容として、どんな節でもつけて唄つてやれば、母親の懐ふところに

抱かれて眠る幼児は、今日の経験を、必ず夢の世界まで持つてゆくだらう。

子供の心持に共應して、吾が子のそのときどきの心を、満してやれる母親の詩心。それが指導の第一だ。

買つて興へた繪本だけで、子供の夢や詩を満たす事が出来るなどとの考へを、若しも母親が抱くとしたら、永遠に、童詩を育む事は出来ないだらう。

仲買や、取次販賣では、幼児の詩は絶対に培ふことは出来ない。

猫と熱心に話しをしたり、「ヨートイドン」の駆足をしてゐる吾が子を見たときに、母親自身が子供と同じ様な心境になり、子供と同じ情熱を持たぬ限り、子供の詩を導くことは、困難ではあるまいかと、しみじみ考へさせられる。

子供達は、大きくなるに随つて、大人が考へる手法や、物の見方を唯一絶対のものとして真似てゆく。

そして、自由な伸び／＼した獨創は、表現形式の固定と共に、忘れられてゆく。

大人の詩の形式や、表現を示されなければ詩を表現することの出来ない子供。

いつも先生の指導だけを俟つてゐて、自分で開拓する興味を忘れたおとなしい子供。
たゞ破壊だけを興じ喜び、先生の指導も心から聴く事の出来ぬ子供。

これ等の子供を、教育の正しい見方、考へ方に依つて錬成してゆかなければならぬ。
國民學校の使命は、父兄、國民の大きな理解なしには、絶対に不可能なものである。

わけて幼児の教育が如何に重大なるかに、父兄の活眼が開かれたき、日本の前途に
洋々たるものが深まつてくるのではないのだらうか。

お母様方よ、児童文化に携る方々よ、

文字なきものの詩に、是非、耳を傾けて戴きたい。

第三編 童畫と性格

童畫と性格

(一) 幼兒の繪と母の教養

赤ん坊は、生まれながらに上手に乳を吸ひます。それなのに、母親は赤ん坊が生まれると、色々と骨を折つて、呑みよい様に乳房をふくませて、更に乳を吸ふことを教へます。

其の爲に赤ん坊は、益々乳を上手に吸ふことを覺えます。

幼兒が繪を描き始めるのは、何時頃からでせう。

そろ／＼片言交りに、語り出す頃から何か繪の様なものを、描きたがる事は、子を持つ母は、誰れも知つてゐる事です。

言葉や童謡が、幼兒の精神生活であるやうに、幼兒の圖畫も、精神生活の表現であ

ります。

それなのに私達は、吾が子が國民學校入學近くにならなければ、圖畫の指導も、性格の躰もしようとは致しません。

家事に追はれがちなお母様方は、學校に行くまでつひうっかりしてしまひます。

そして取返しがつかぬ程、手遅れになつてゐるのを見て、どうしたらよからうとあせり出します。

童畫は幼兒の唯一の仕事であります。唯一の獨創であります。思ひやりの心を以て童畫や童謡を導き、性格を築く生活を、正しく習慣づけてやらなければなりません。

それこそ、新しい世代の母親の教養として是非なさなければならぬ務めであります。

幼兒の生活の態度は、とりもなほさず、將來の吾が子の姿であります。

國民學校の先生は駄目だ。中學校の教育が悪いと考へる前に、家庭の生活を反省して見なければなりません。

母親として、吾が子に恥しく感ずることがありはしまいか。

この反省こそ、すべてのものの建設の基礎となります。

お母様は、吾が子の將來の基礎を、幼ない生活のうちに建設する心の目と、心の耳を養はなければなりません。

童畫は幼兒の心の窓と云はれてゐます。その繪を見て、正しい性格の判断まで出来る様になります。

そんな事を云つて、吾が子の繪の欠點を補ふことから、吾が子の性格の鍊成まで、果して進めるだらうかと、疑問に思ふお母様もおいででせう。

然し私は必ずお母様には出来ることだと思ひます。

考へて見ませう。幼兒の精神生活は、あまりにも母親の生活に依ることが、多すぎる様です。

幼兒の生活や行爲は、母親の責任、家庭の責任である、と云つてもそれをお怒りに

なるお母様はいらつしやらないでせう。

この意味で、母親の反省、母親の教養は、幼児の教養の基礎となります。

わけて幼児の精神生活や、教養のすべてが、その創作である童畫と童謡であることを考へれば、母親の反省、母親の教養もこゝにありたいものです。

(二) 童畫指導のコツ

幼児の繪は、少しの偽りもなく心の姿を、赤裸々にあらはすものであります。

こゝに童畫のよさがあります。

無邪氣で、天真爛漫で、眞に愛すべき童畫は、子供の人格や性向そのまゝであります。

こゝに私達は童畫を指導する、コツを発見することが出来ます。

吾々は誰れでも、直感力(靈感)を持つて居ります。絶えず、一つの事を熱心に研

究すれば、この力は益々伸びて参ります。

吾が子の繪を熱心に見守つてゐるうちに、私達の心に知らず／＼この靈感が起つて参ります。これが指導力になるのです。

母親の眞心と、吾が子の繪を熱心に研究することから、湧き出る直感の力は、繪を導く最大のコツであります。

何事も普段の訓練が非常に役に立つことを考へますと、常に吾が子に接して、童謡童畫を導く立場にあるお母様方の使命は、非常に大きいと感ぜられます。

毎日、見たり、聞いたりする吾が子の繪や詩を、子供の生活といつしよにして、反省なさつたならば、それが吾が子の唯一絶対なる指導のコツとなることを、是非知つて戴きたいと存じます。

繪を描く順序の定まらぬ

幼児はどう導いたらよいか

幼児が繪を描いてゆく順序と云ふものは、一體どんな風でせうか。人間を描く場合などは、矢張り頭から始めて、下方に及ぶやうです。然し、極く最初は、頭の方ばかり、ゴテゴテと念入りにして、下方のない幽霊の様な人間を描くのは、どなたも感ずる事でありませう。

又家などを描く場合には、多くのお子さんは、屋根から描き初めます。木を描く時は、必らず、根や幹を先にし、枝などは描かずに、兩側に葉を描き添へます。

幼児の繪は一般に、自分の足許よりは高いもの、遠いものから仕事にとりかゝるやうです。

身近なものは、どうしても後廻しにするかたむきがあります。

私達大人の生活を反省して見ましても、父母の恩などと云ふことは、なか／＼身近かには感じません。

まして空氣の有難さを感じる人などは、おそらくないのと同じです。

多くの子供は、何を描いたらよいかきめもしないで、無意識に地平線を一本引きまします。すると子供達の考へは、妙に定つて、次から次へと、色々の想像が浮んで、畫面も賑やかになります。

然しこの様な思ひつきから、繪が生まれて来る事は、繪のポイントも、統一もなくなりまますから、餘りよろこばしい現象ではありません。

最初から、どんなものでも、題材だけは定めて、それに向つて、一生懸命描くやうに、指導したいと存じます。

例へ、出来上つた繪が單純で、成績が餘り香ばしくないものでも、繪を營む心の働きのから見ますれば、この様な御子様の方が、將來大いに見所ある様になります。

暗示や決定を與へられなければ、何を描いたらよいか、わからぬ様な御子様は、きつと生活そのものも、漫然としてとり留めがありません。

子供の生活は、そのまゝが繪となり、文となるものでありますが、幼時にはそれが見出せないのです。心がそれを把握とらへすることが出来ないのです。

繪と云ふものが、何か自分の生活を遠く離れた手の届かぬ所にでもある様に考へがちなためです。

この様な考へ方を、早く打ちやぶつて、日常生活の間に繪や、文の世界のあることを、見つけ出す指導をしなければなりません。

若しも、この事に成功しましたならば、童畫指導の大半は、成就したものであります。

私達も一億一心、滅私奉公などと、徒らに大言壯語して、自分こそ、天下の第一人者の如く考へてゐましても、職場で同僚と協力も出來ず、家に歸つては、隣組のつま

はじき者であつたならば、これこそ、獅子心中の蟲と云はれるでせう。

何事も平凡なもの、身近なものの中に理想や眞實のあることを知つて、それを發見させる、能力を養ふことが大切であります。

以上の事が出來上りましたら、形と色との指導をいたしませう。

それには小さい時から、自由に、豊富に繪を描かせる指導が、第一であります。

少々位「これは」と、思ふ様な繪を描いても、一向氣にかけず、例へば猫が虎にならうが、豹にならうが、獅子にならうが、あまり氣にしない方がよいと思ひます。

「よく描けた。もつと澤山描きなさい。」と、どし／＼描き出す力を、養成することが一番大切であります。

描く順序の定まらぬ子供に、二通りあります。

一、は題材が定まらぬのに、どん／＼描く爲に、途中から段々と變化してゆく子供の繪。

二、は題材を決定して描き始めるが、描いてゆくうちに、聯想作用が働いて、内容が次第に變化向上してゆく繪であります。

前者よりは後者の方が、見所のあるお子さんです。この様な子供は次第によい反省と共に、描法も改善されてゆきます。

描く順序は、近きより遠くを描く様にし、人物を先に、周圍や背景は、後まはしにする様な指導が、望ましいと存じます。

然し始めには、この様な注意がましい事を避けて、極力肯定的態度で進み、子供の智能も進み、自然に自分の作業に不満を感じ始めた時に、指導する事が大切です。

「機を俟つ」、「機を捉へる」ことは、幼児と日常生活を共にしてゐるお母様以外には不可能なことであります。

何時も同じ題材の繪を描く幼児の指導

私の知つてゐる畫家さんで、昔の文展に一回入選し、その後虎ばかり描いてゐる人があります。或地方に行くと、この人の名が大觀や栖鳳よりも、知られてゐるのに驚いた事があります。

又或畫家は、牛ばかり描いてゐるうちに、帝展は通るし、特選にはなる、と云ふ様に、何時の間にか有名になり、牛の繪が賣れて賣れて仕方がない、と云ふ話を聞きました。

國民學校の入學當初の子供に、

「皆さん、自分の好きな繪を描いてごらんさい」と、云ふと何時もきまつて、富士山や日の丸の繪ばかり描く子供があります。

私の娘なども、きまつてチュウリップや、頭ばかり飾り立てた、お姫様ばかり描き

つゞけた時期がありました。

幼児の描く繪が始終同一の題材に定まつてしまふ原因は、描く子供がその題材に、絶大な感動、感銘を與へられたか、或は好みのかたよつてゐる場合か、さもなければ、それより外に描けない子供の何れかであります。

年百年中、同一物ばかりを描き續けても、それ程心配することはないのでせうが、内容に少しの變化も無いやうでは困ります。

それは描く力の不足してゐる證據であり、又他のものを描いて見ようとする努力の無い子供であります。

これは能力的にも、意志的にも欠けてゐるものがあるからであります。

一體これらの題材中風患者は、どうしたらよいでせう。

題材中風患者の大きな病因は、幼い時に繪を描くことを、少しもしなかつた子供であります。それは國民學校に入學する前になつて、氣をもみ始めた母親の指導で、富

士山位は描けるやうにと、急に強く教へこまれた様な場合に起ります。

この様な子供に、一時に繪を描く態度を變へる様に、指導することは出来ませんが長い根氣で、徐々に他のものも描き得る、心の働きを促すことが大切であります。

題材の何時も變らぬ繪を描く子供の多くは、非常に依頼心が強いのであります。

誰か救援に来てくれるだらう位に、たかをくゝつて居る様な性格があります。

私はこの様な繪を描く子供のお母様に、

「どうしたら繪が好きに、そして上手になれるでせう」と相談を受けた事があります。

私は母親の持參した繪を見て、

「お宅のお子さんは、まだ一人では自分の帯を結べませんね。」

「顔も一人では洗へないでせう。」

「お便所へも一人ではゆけないでせう。」

と、云ひましたら、

「どうしてそんな事がおわかりになるのでせう。」と、大變驚かれました。概して、何から何まで、女中任せ、婆やまかせ、母親任せの子供の繪は、この様な傾向になりがちです。

畫を描き始める幼時から、思ひのまゝに畫面狹ましと並べさせることは、繪の一番よい指導です。

お玉杓子と、人間が並んでゐても、木に魚がとまつてゐても、そんな事はかまひません。

あまり干渉し過ぎたりすると、前の様な繪になつてしまひます。

幼時の繪は、萬事指導をすると云ふ態度を捨てて、何事も大目に見て、たゞ自由活動に、表現する力を養ふことに主眼を置き、その喜びに浸らせることを第一にしなければなりません。

色數の尠い繪、色數の豊富な繪

色數の尠い繪を描く幼児の多くは、色彩的に偏頗な傾向を持つて居りますから、どうしても一方的な、色ばかりを用ひたがるものであります。

この傾向のお子さんに、

- 一、暖色の系統を、多く用ひたがる子供と
- 二、寒色の系統を、多く用ひたがる子供と
- 三、系統もなく、雑多な色を用ひる子供

の三つの型があります。

寒色は、どうかと云ふと、理知的な子供が好む色であります。

朝とか、夕とか、或は秋景、曇、雨などが表現され、又は、陰影の多い室内等の表現に適し、何んとなく、陰慘な空氣、深刻な場面、哲理的、幽玄的な感じを持たせる

ものですが、若しも、幼児が一年も二年も、この色ばかり用ひて、外の色を使はぬ様でしたら、色感に異常があるか、或は、精神的影響のものかを調査する必要がありま

す。

第二の暖色系統を好む子は、気分が前の子供と正反對であります。

明朗で、快活で、派手好みで、情熱家であります。

第三の子供は、右の二例の如き統一したものでなく、雑駁な考への子供です。

まあ手當り次第と云ふ式ですが、指導をするには、この方が白紙でよいと思ひます。色彩的の癖がないからです。

要するに色数の尠い繪を描く子供は、折角豊富な色彩を、身近に持つて居りながらそのうちの一端しか活用出来ない子で、言はず實の持ち腐され、とても申した方が適當でせう。

これは非常に頑迷で、固陋かたくなな子に多く見うけられます。

好みがかたよつてゐて人の注意位では、なか／＼色を變へるものではありません。もつと性格を圓滿に、鍊成する様に工夫することが大切であります。

色彩も好き嫌ひなく、一樣に用ひてゆく様努力させることでもあります。

色神の異状、色感の異常は、已むを得ない事であり、同情すべき事でもあります。

決して、落膽させず、楽しく描き遊ばせる様にする事が肝要であります。

繪は色彩ばかりで、描くものではありません。

色を豊富に使ふ子供は、何れかと云ふと、表現力が旺盛さかんで、比較的圓滿な子に多い様であります。

たゞ豊麗な色と云ふものは、子供の繪では用ひ方を餘程整理しませんと統一を欠き迫力を失ひ勝ちであります。

綴方で申しましたら、餘りに、美辭麗句が重複かさなり過ぎて、眞實が心の金線にピンと響かないのと同じであります。

おとなしい子供の繪

子供がおとなしいと云ふ原因を、調べて見ますと色々あります。

- 一、身體が病弱で、おとなしい子供
- 二、活氣がなく、生活力が乏しい爲におとなしい子供
- 三、生まれつきおとなしい子供で、自分自身も落ちついてゐると自覺してゐる子供
- 四、家庭教育の度が過ぎ、躰があまり厳し過ぎるために、おとなしく見える子供
- 五、外ではおとなしく、家では亂暴な子供と、内ではおとなしく、外に出ると亂暴な子供（即ち俗に云ふ内辨慶、外辨慶）
- 六、或時はおとなしく、或時は烈しいと云ふ様に、性狀が變化する子供

このうち四の場合の如く、家庭教育が度を過ぎて、嚴重なために、子供がおとなしい場合があります。

く見ゆる場合は、お母様の教養ある家庭の子供に多い様であります。

親の虚榮、親の面子、或は材料のために、めちやくにされたのであります。

この様な誤つた母親の態度は、伸びようとする、吾が子の力を徒らに掣肘するだけであります。

この様な母親の膝下にあるお子さんは、全然自分の力を發揮することが出来ません。そして徒らに、反抗心だけ強くなります。強く命令された事はするが、積極的に自分から進んで、考へたり、實行する力がなくなり、先生や父兄の援助や、指導だけを俟つ様になります。

そしてこれ等のことは、最もよく繪に現れて參ります。

内辨慶、外辨慶の子供には、家庭生活と社會生活とが、あまりに異つてゐるためにそれに順應することが出来ないので、性格の矛盾を生む場合と、頭腦がすぐれてゐて要領のみよい子供（即ち二重人格の子供）との、二つの場合があります。

幼ない子供のうちから、人格に全然相反する、二つの表現のあることは、恐ろしい事と云はねばなりません。

子供はどちらかと云へば、その場、その場に適した様な生活をしますが、意識的に二重の使ひわけをする。人格表現を持つと云ふことは、嚴重に戒めなければなりません。

この様な子供の繪の成績は、浮動しがちです。或る時は立派な成績を挙げ、或る時は同一人が描いたとは思はれぬ様な、下手な表現をいたします。

殊に、監督者のある場合と、放任した場合との成績には雲泥の差を生じがちです。「私の家の子供は、私がついて描かせると立派にかくのですよ」と、語るお母さんがありますが、自分のお子さんの二重人格を知らない言葉です。

これは繪ばかりに云はれることではありません。總べて、成績の浮動する兒童は、母親として餘程注意しなければなりません。

浮動成績は、必ずしも、性格からばかり來るものではなく、或る場合には、健康、気分などにも影響される事がありますから、注意を要します。

丁寧な繪を描く幼児の導き方

丁寧な繪とは、線などもきちんと描き、形も確實ですが、勢がありません。どちらかと云へば、繊細な感じの繪で、色も淡く塗り、線の外まで色がはみ出す様な事はありません。

まあ、女性的の美しさを持つた畫で、粗暴な男性的の繪とくらべて、よい對象になります。

此の様な繪を描く子供は、性格が極めて温雅で小心です。

身體も弱々しく、運動なども活潑でなく、静かな遊戯、音樂などを好みます。

毎日の生活も、まゝごと遊びや、色紙、切り紙遊びなどで日を過し、手のやけない子供ですが、身體的には、兩親の心配が絶えません。

物事を大變心配し、整頓や準備では、母親に心配はかけません。

人前で恥などかゝせられると、直ぐ泣きます。中には深刻にくやしがり、人を恨むことも深い様です。

融通がきかず、先生の言ひつけなどは、一分一厘でも違つたら大變です。

この様な性格のお子さんには、自由自在、臨機應變、自主獨往の勇敢な態度や、才氣を望む方が無理ですが、この様な心持を養はぬ限り、繪の方も改りません。

けれども一面、誠に同情心深く、物の哀れを知り、物事に深く心を碎き、人の尊敬を受ける様な點があります。

わけて、日本女性の鑑とされる女性は、このやうな優雅な思ひ遣りの中にも、非常の際の時は、男子にも勝る強さや、思慮を働かすことの出来る型の女性でありました。

故にたゞこのまゝに、投げやりにする様な事なく、その勝れた美しさを、益々助長し、短をすてて、足らざるを補ふ様な、心の指導が望ましいと存じます。

この様な繪を描くお子様を持つお母様は、子供の性格を導きながら、繪の表現を指

導する様にして、戴きたいと存じます。

例へば「あなたの繪は、こゝが大變よいね。」

「だが線はもつと勢よくかきなさい。色の塗り方も、少々は、はみ出してもよいですよ」と、安心を與へてから、描かせる様にしたいと存じます。

亂暴な繪のよさについても、説明してほしいと存じます。

この様な表現は、女の子に多いのですが、男の子にも少くはありません。

偏食の子とか、頭がよくて、病弱の子にも多い様ですから、健康上にも、注意をしてやることが大切です。

亂暴な繪を描く子供の導き方

亂暴な繪を描く子供の多くは、性質が粗野です。性質が粗野なばかりでなく、その智能も粗野です。

比較的繪を好むお子さんでも、畫面せましと、書き荒します。

この様なお子さんには、外部から色々、五月蠅さい注意や、指導をなさるよりは、側から好意的に見守る位の方が、効果があります。

出来るだけ、否定的な注意を止めて、肯定的な寛大な態度で、接して戴きたいと存じます。

元來幼兒の繪の指導で、最も大切な點は、「畫面の上で、思ふ存分遊ばせる。」と、云ふことです。

氣兼ねしながら、繪を描く様な事では、なんの役にも立ちません。

獨り勝手に振舞ふことの出来る様な、心境にする事が大切です。

それには、

「坊やお父さんに、犬の繪を描いて頂戴よ」などと云ひますと、それはく得意になつて描くものです。

この自由な發表、自由な創造を希ふことが、幼畫指導のコツであります。

お母様方が、繪を描く立派な腕、勝れた教授法を知つてゐるよりも、先づ幼兒を畫面で、立派に遊ばせるやうにして置くことが第一です。

亂暴で繪の嫌ひな子供は、出来るだけ簡單に、片付け様としますから、學校の様な一齊指導では、なか／＼改善することは出来ません。

どこまでも、家庭のお母様が主となつて、幼稚園や、國民學校の先生に協力して戴いて、根本的に、繪に對する心持ちから入つて戴かなければなりません。

反抗心を起させたりする様な事がない様に注意して、良い點を認めてやり、賞揚し

てやる事から、入りたいと存じます。

幼い子供でも、自から認めてゐる良さを賞められることは、子供を自信づけると共に、反省を與へる原因となります。

「此處を斯様に描いたら、もつと良くなるだらうか？」などと、やはらかに反省させて、積極的に進んで努力させる様にしなければなりません。

粗暴な繪を描く子供には、いつも丁寧な繪を描く子供の、長所を攝取して、其の態度を反省する様に、努むべきであります。

仕事に厭き易い子供の繪と

その性格の導き方

二五〇

線で形が立派に描き出せる子供は、頭のよい子供です。

然し彩色で、これを仕上げる場合には、如何に形が立派に出来てゐても、それは仕事の半分です。

物事を面倒がる子供は、意志薄弱の子に多い様です。

稀には、身體的欠陥から來てゐる場合があります。又學科の好き嫌ひのためになる場合があります。

幼い時から、一つ／＼積み上げる努力をした事もなく、氣儘に放り出されてゐた爲に、完成迄我慢することの出来ない子供が、相當多く見受けられます。

圖畫に限りません。學問そのものに身が入らず、宿題だから描くだけだ。と、云ふ

考へで、その場にこしの仕事をする子供が居ります。

身體上の欠陥のある子供は、先づ身體を鍊り、身體的の粘り強さを先きにして、共に意志の方も、鍊へるやうにしなければなりません。

然し幼い子供は、自分の描いたものが、未完成であることを氣づかずに、完成したもものと思つて居る場合があります。

この様な子供に對しては、未完成な部分を指摘して、親切丁寧な指導を加へなければいけません。

私の知人のお子さんですが、幼い時は根氣もあり、勝れてゐたのですが、大きくなるに従つて、物を投げ遣りにし、進んで物事をやらうとしなくなりました。

畫を描くにも全く、その場にこしの態度で困ります。と、お母様から相談を受けた事があります。

私はどうした事かと、種々原因を尋ねて見ました。すると、このおさんは、一時

野球に夢中になつたのですが、両親はスポーツに理解がなかつたために、子供が怪我をしてはと、そればかり心配して、とうとうその希望を抑へつけてしまひました。

それからと云ふものは、何事にも興味がなくなり、物事を意氣こんでやる事がなく學業にも身が入らなくなつて來たのであります。

子供の興味や意慾を、親の考へで抑へつけてしまふことは、何事に對しても興味をもてぬ子供にしてしまふ場合があります。

それですから、このような性格の子供には、一つの物に興味を持たせて、あくまでもそれをなしとげさせる様にしなければなりません。

又子供としては、精一ぱいの仕事をしてゐるつもりなのに、親の高い境地から、頭ごなしに叱りつけて、多くの注文を出す事は、子供を憂鬱にし、かへつて、逆の効果になる事が多い様です。

仕事に對する、責任感とでも云ひますか、全身全力を入れる習慣を、養成すること

は唯一の性格鍊成であります。

仕事に厭きやすい子供は、注意が散漫であり、畫用紙などでも、次々と新規のものを求め無駄に使ひます。このような子供には、物を叮嚀に使はせる習慣が大切です。

仕事に厭きやすい子供は、叱責や、壓迫などの様な、急激の態度をとらず、身體的にも性格的にも、一つ／＼積みあげる様な努力をさせる事が必要です。

畫面の用ひ方

お子さんに繪を上手に描かせ様としながら、畫面の用ひ方をちつとも、指導なさらぬ、お母様があります。

畫面の用ひ方は、子供にとつても、お母様にとつても、繪を描くうちで、一番むづかしい様です。

畫面の用法を、やかましく注意すると、子供は繪を描くことを、面倒がるやうになります。

若しもあまり小さな、繪を描く様な場合は、「こんな大きな紙に、こんな小さな繪を描いて、もつたないわね」

「こゝがあまり白紙になりすぎてますね。こちらの方には何を描くつもりだったのですか」と、やさしい話合をする位の方がよいと思ひます。

子供の繪畫には、大人の計畫する、強調、効果、省略等と云ふ畫面構成の手法が、偶然の場合に現れます。

その様な場合には、機會をのがさずに、賞賛をし、説明をしてやらなければなりません。

子供の單純や、純情は、大人よりも獨創的で、未開發の美を捉へる、機會が多い様です。それで童畫を特に研究する専門家もあります。

然しこれは偶然であり、氣まぐれが多いので、この儘にして置きますと、行きづまつてしまひます。反省と指導を忘れぬ様に致したいと存じます。

童畫の構圖に、單一なるものを、畫面一杯に描く子供がゐます。

これは大變面白い氣宇のある、お子さんです。

又中には、頭が杜撰で、遠慮體裁おかまひなしの場合もあります。

智能が秀いでてゐて、この様な構圖の繪を描くお子さんは、突進主義で、自信を持

つて居ります。

次に、廣い畫面を持ちながら、或る一小部分に、小蟻の逼ふ如く、小さな繪を描くお子さんがあります。

この様な繪を描くお子さんは、眼を畫面に擦る様に近寄せて、笑顔もせず、熱心に描く癖を持つて居ります。

日本畫の大家などで、大きな畫面に、小さな單一物を描く場合と比較して、「なか／＼」大家の風格がある」などとの親馬鹿を發揮してはいけません。

若しもお子さんが、こんな繪ばかり描く様でしたら、要心しなくてはなりません。

これは智能の低劣なる兒童に現れる現象であります。この様な繪を描くお子さんは國民學校入學當初は、學科の成績はよいのですが、二年、三年と進むに従つて、成績が低下致します。

これは一年の成績が、子供自身のものでなくて、附刃的のものであり、父兄の成績であつたのであります。

畫柄を畫面の中央に大きく表現させる様に、極力努力する事が、この様なお子さんには、一番大切な性格鍊成となります。

性向的に見ますと、物事の末梢に拘泥して、不必要なる事柄にのみ力を注ぎ、問題の肝要なる中心點を見出す能力がなく徒に危惧して、小心慙々たる欠點があります。

大局に心を注ぎ、小事にも着眼を離さぬ様な、態度の養成に努めましたならば、繪が向上するばかりでなく、學科全般の向上を見る様になります。

繪を立派にすることは、結局物の見方、考へ方が基礎でありますから、性格の鍊成を措いて、繪の向上も、學科全般の成績改善もありません。

忘れられてゐる色差の教育

幼児の繪と、音樂、綴方、お話、舞踊等とは、切つても切れない關係にあります。綴方が上手になるためには、色々の條件がある様に、繪もそれに似通つたものがあります。

一つは形相であり、二は色彩であります。簡単に申しますと、形と色であります。然し幼児に對して、彩色法を教へるなどとの事は、困難であります。然し同色にも澤山のちがひがあることを、覺らせる事は出来ます。それには、色差を認めさせる事があります。

色差を認めさせるには、

「これは黒ですよ」

「これは白ですよ」と云ふ様に、わかり切つた色の區別から始めて見ませう。

三原色程度のことから、三間色程度と云ふ様に、次第に間色を多くして、二色、三色、三間色を混入して、八色にすると云ふ様に致します。間色とは、中間色の事を云ふのであります。

間色をもう一段増加しますと、十二色となり、十五色となります。

更に灰色系統のものを混じて、次々に色種を増加してゆく様にします。

單に十五色であつても、塗り方により、種々なる色相を倍加することが出来ます。

第一にクレヨンで白い地紙が、見えない位にベタ塗りに致しませう。すると、クレヨン本來の持つ最も強度に近い程度の、色度を發します。その塗り込む度合を、次々に弱めて見ませう。

その強弱により、一本のクレヨンで、七段から十段階位の色差を、發見することが出来ます。この練習を上手に出来るまで致しませう。

この様にして、一色のクレヨンで十段の色差を出す事に成功すれば、十五色のクレ

ヨシで、百五十色の色相を出す事が出来ます。

智能の勝れたお子さんは、二百色位は平氣で出せます。

又この色差のすべてに、白色を交配してみませう。すると、平和色めいた、なごやかな色相が、その濃度に應じて發揮されます。すると二百色の倍となります。

この様に工夫しますと、僅か十五色のクレヨンを用ひて、優に數千の色相を發見することが出来ます。この様にして、第一に色そのものの種別を明かにし、次に塗り方による發色法を見出させる。

更に進んでは、混色法による發色法を、幼兒自身が、工夫する様な指導が望ましいと存じます。

近頃は、學校、家庭に於ける音感教育の必要が、唱導されて居りますが、色の世界に於ても、母の教養は必ずしも高められては居りません。

この色差の發見は、兒童自身が自然に、タツチと云ふ事を發見する原因となるでせ

う。

タツチで色差を出す工夫などが、指導せずしてなされることは、益々子供の自信を強めます。

色差の指導といひ、音感の指導と云ひ、要は母性の教養の向上に俟たなければなりません。

(出文協承認)
あ400817號



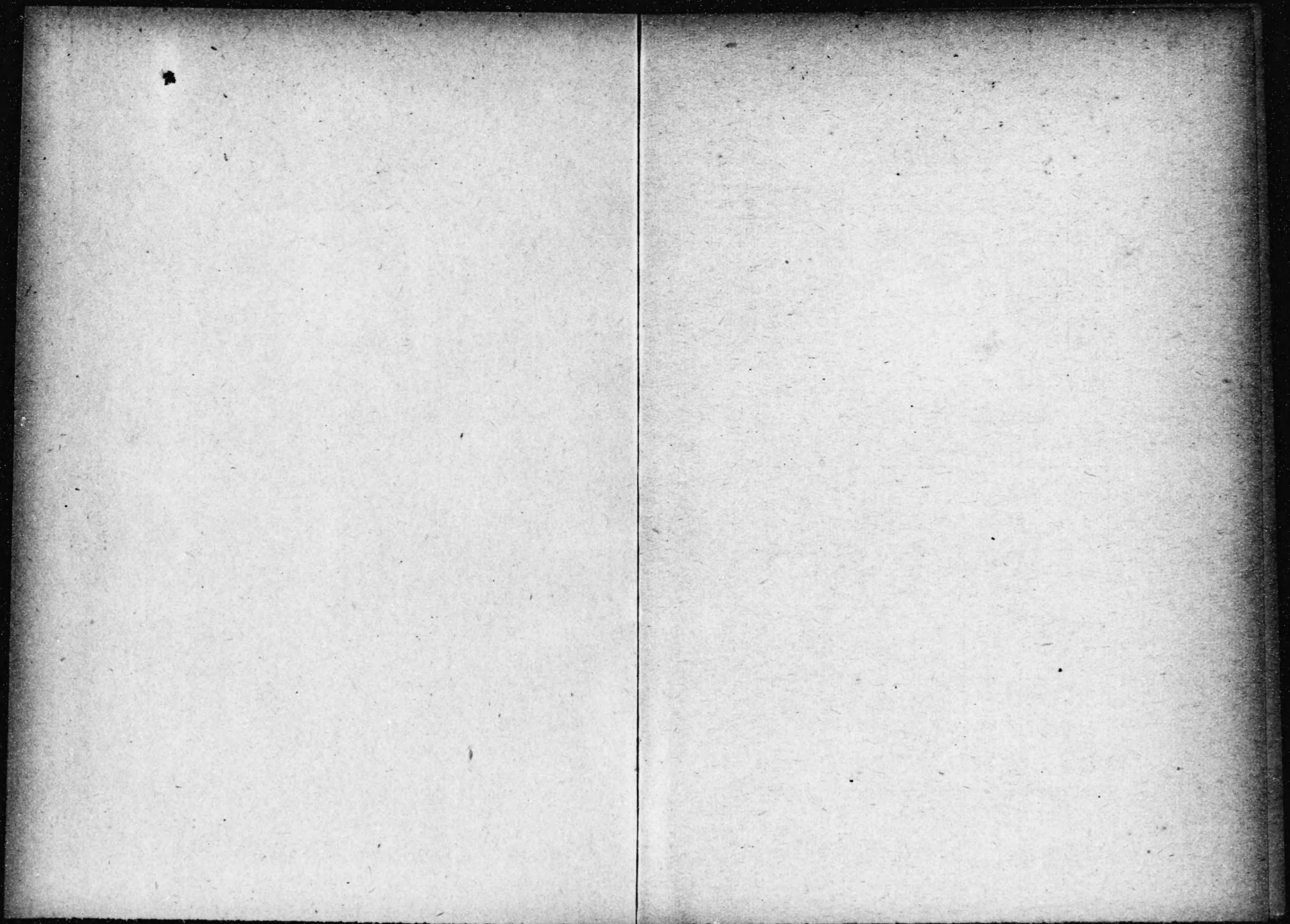
Ⓢ 定價一圓六十錢

昭和十八年三月十日初版印刷
昭和十八年三月十五日初版發行
(五〇〇〇部)

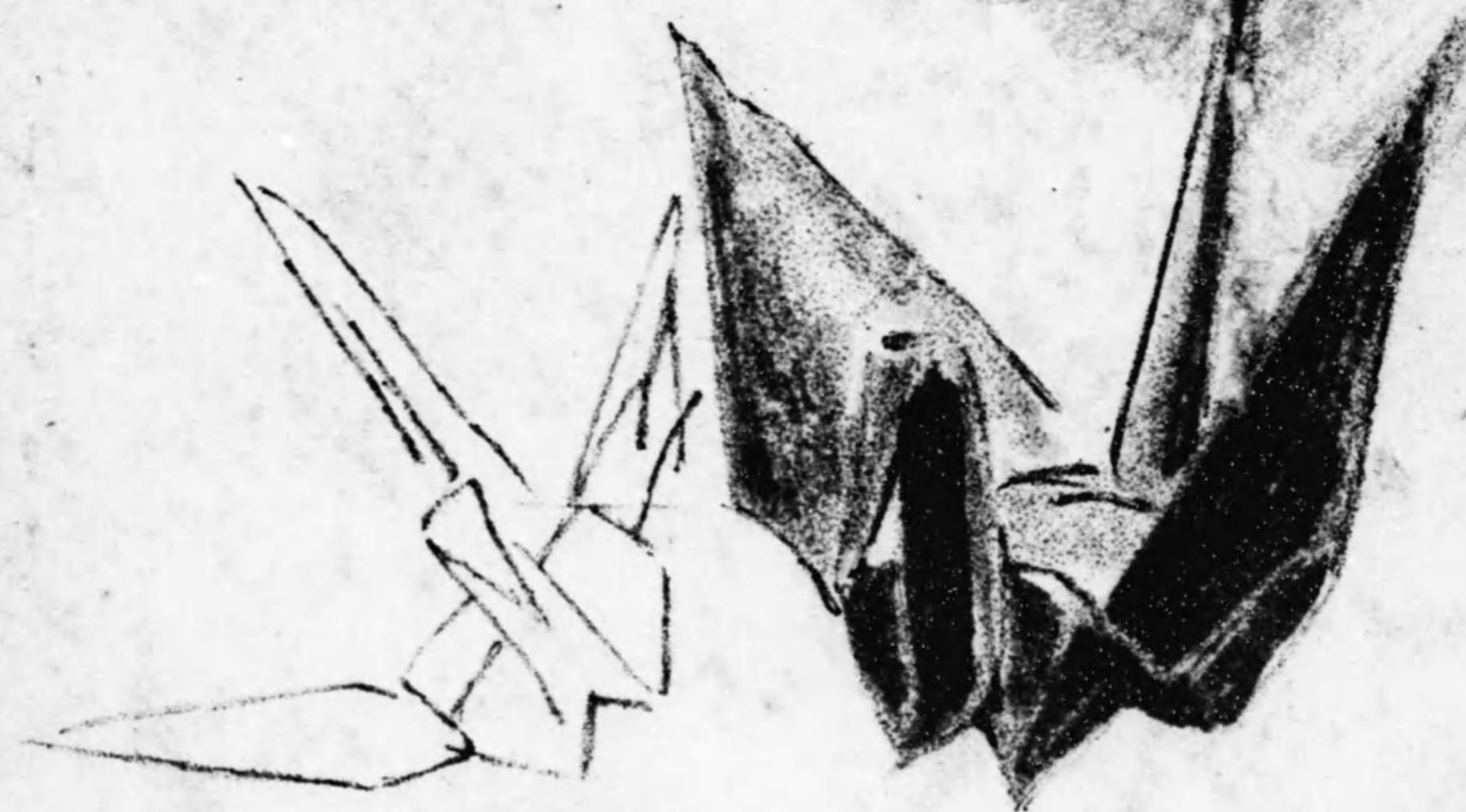
◆ 文字なきものの詩 ◆
— 奥 付 —

編者者	大塚二郎
發行者	關川安治 東京市神田區三崎町二ノ五
印刷者	(東東二〇) 奈良直一 東京市小石川區諏訪町五六
印刷所	株式會社常磐印刷所 東京市小石川區諏訪町五六
發行所	愛讀社 東京市神田區三崎町二丁目五番地 振替東京一七五九五番 電話九段(33)二四八四番 會員番號一〇一〇五八番

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九



271
278



愛讀社版

Ⓢ 1.60